

# 船釣りの作法

釣技  
食技



ポイントの水深は70メートル前後。中層に群れるウルメイワシやアオアジ（マルアジ）の周辺に大型魚が着いている



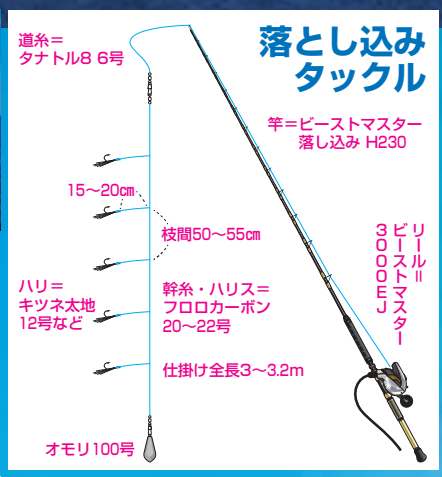
## 其の六 九州佐賀県・玄界灘の落とし込み 高橋哲也の落とし込み in 九州・玄界灘



6キロのヒラマサ。玄界灘の落とし込みの主役

### 落とし込みの作法

テクニクが全てではありません。運や時間に釣らせてもらっていることを、肝に銘じておくべきなのです。



▲イワシが激しく暴れ捕食者の気配を伝えたら竿先を上げてスタンディングポジションを取る  
▼当日のタックルは「ビーストマスター落とし込みH230」と「ビーストマスター3000EJ」の組み合わせ。仕掛けは5本バリ、全長3メートルほど



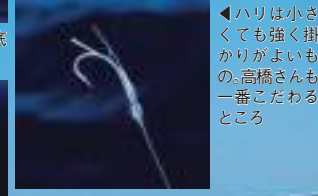
ウルメイワシが掛かったらそのまま落とし込む



▲ドラクは6キロほど。非常に強いが、底から魚を離したら瞬時に調整している



▲ベイトは主にウルメイワシ。剥がれたウロコが大型魚の就餌欲をかき立てる



▲ハリは小さくても強く掛かりがよいもの。高橋さんも一番こだわるところ



「落とし込み」とは、中層で太いサビキ仕掛けにイワシなどを食わせ、そのまま海底へ向けて落とし込んで大型魚に食わせる釣り。  
九州北部を中心に絶大な人気を誇り、イワシ（主にウルメイワシ）が回遊してくる夏から年内いっぱい、釣り人が絶えることがない。  
ターゲットはヒラマサ、ブリ（ワラサ）、ヒラメ、マダイやサワラのほか、アラ（クエ）、アコウ（キジハタ）など。つまりイワシを捕食する様々な魚が釣れる。

舞台は玄界灘、馬渡島沖の水深70メートル前後。イワシの群れの反応は水深40メートルから下に出ている。  
高橋哲也さんは5本バリ、ハリス20号の大物狙いの仕掛けを投入。ビーストマスター13000EJはほぼフリー、100号オモリに引かれて仕掛けは素早く沈んでいく。

着底するとすぐ、高橋さんはクラッチを入れて高速巻き上げ。リールから目を離すことなく探見丸スクリーンでイワシの反応を確認しつつ、仕掛けをタナの上から再度落とす。  
「イワシは道糸を避けるから、サビキを上にも誘っても掛かりません。あくまで落ちて行くときに掛かるんです」  
落下中にイワシがハリに掛かると、道糸のマークが減速する。そして、そのまま海底へ「落とし込む」。

オモリを海底から離して待つと、イワシが泳ぎ回る振動を伝えていたビーストマスター落とし込みH230の竿先が、激しく振幅し始める。同時に、高橋さんはスタンディングポジションに構える。そして……

竿先が突っ込む、合わせる、リールがうなりを上げる、竿が弧を描く。一瞬の出来事だ。  
海底から魚を離すと、今度は右手で竿を支え左手でリールのスピードレバーとドラクを素早く調整、見事に引きをいまして浮かせていく。  
海面に現れたのは4キロ級のヒラマサ。続いてワラサを挟み、朝日が眩し

◎高橋哲也 沖縄県在住。全国各地の磯、船釣りの世界で多くの大型魚を仕留めてきた。単に釣るだけでなく、広い目で海を見るカリスマアングラー。



# タックルの作法

瞬発力&パワーと繊細さ  
相反する要素を  
同時にコントロールする。



▲探見丸の映像をそのままリールのディスプレイへ鮮明に映し出す探見丸スクリーン。リールと竿先から視線を動かすことなく海中の情報を知ることができるため、一度使うと手放せないほど便利(探見丸スクリーン/NEW 海底・魚群水深表示はすべての探見丸親機搭載船で使用可能※魚群水深表示はアクティブシユ対応の親機搭載船のみ使用可能)

# 食の作法

切り方で食感の違いを楽しむ  
ヒラマサの刺身



「船釣りの作法」動画公開中。  
SHIMANO TV または YouTube SHIMANO TV 公式チャンネルにてご視聴いただけます。



▲16ピースマスター3000XPと比べ、耐久性2倍の強化ギアシステム、最大巻上速度約15パーセントアップを実現している

## 【ピースマスター3000EJ】

○イワシを掛けるまではスピーディーに巻き落としを繰り返して、食わせてからは根ズレを防ぐためにパワーファイトで一気に底から引き離し、宙層では魚の強さに応じてスピードとドラッグを瞬時に調整、引きをいなして浮かせる。これが高橋哲也さんの落とし込みテクニック。  
ハイスピード、ハイパワー、高耐久性と高い操作性に加え、手でカラー魚群探知の「情報」をリアルタイムで知ることができる【ピースマスター3000EJ】は、一日の釣りにおいてこれら一連の作業をすべて途切れることなく完遂。その事実が、最強電動リールと呼ばれるポテンシャルの駆力と言えらる。  
●SPEC ギア比=3.9 最大ドラッグ力=20kg 自重=810g 糸巻重PE=4号-450m、5号-350m、6号-300m、8号-200m 最大巻上長=70cm/ハンドル1回転 ハンドル長=75mm ヘアリング数=BB10/ローラー1 実用巻上持久力=13kg 最大巻上速度(分)=163m(1kg負荷)、128m(5kg負荷)、96m(10kg負荷)

▼レーシングカーや新幹線にも採用されているモーターと同じ基本構造を持つハイパワープラスチックモーター「ギガマックスモーター」を搭載



サワラは九州でも人気が高い



高橋さんも大好物のアカヤガラ



ガイドはすべてゴールドフレームSICガイド

▼リールの脚を固定するパーツを平面設計とし、ダブルナットとともに樹脂製クッションを装備、リールをしっかりと固定できるオリジナルデザインアルミシート



アコウ(キジハタ)



大きなイサキが食ってきた



▲ハイパワーXフルソリッドはパワー、粘り、操作性と同時に、落とし込みに欠かせない竿先の喰い込み性能も両立

## 【ピースマスター落とし込みH230】

○大型ヒラマサと勝負するべくハリス20〜22号を使い、底から強気で引き離し、その後はいなして浮かせていく高橋哲也さんは、フッキングからヤリトリにおいて「ピースマスター落とし込みH230」を一定の角度に保持することによってパワーと粘りを引き出し、ヒラマサを根から離し、浮かせていく。そのロッドパワーはモンスター級にも怯まない。  
●SPEC 全長2.3m、2本継、仕舞寸法198.4cm、自重698g、先径2mm、オモリ負荷80〜200号、カーボン含有率57.2%(ほかMH235)

あるから面白いんです。食いが止まった、よし、次は違う魚がくるぞ、とか。楽しいですよ」  
その言葉どおり、昼を過ぎると根魚やイサキ、サワラやアカヤガラが食ってくる。そのたび、高橋さんは子供のようには喜んでる。  
仕掛けはハリス22号のまま。次第に、再びイワシがよく掛かるようになる。側で見ていると、状況は海が変わってきたのが理解できる。つまり、高橋さんは自分のスタイルがブレないから、海の変化を読み取れる。ゆえに、10キロ、15キロ級のヒラマサと出会うワンチャンスに挑むことができる。  
「魚は生き物だから、人間の考えているようにはいかない。仕掛けでどうこうするとか、テクニックが全てではありません。運や時間に釣らせてもらっていることを、肝に銘じておくべきなのです」  
高橋哲也が言うからこそ「運」は大きな意味を持つ。それは自然への「畏敬」と「謙虚さ」だ。  
あえて言うのなら、それが高橋哲也の海への作法。手にする道具は、おのずと大きな意味と、価値を持つ。

それが落としこみの面白さです」  
その後も投入のたびに青物を掛けては流れるようなヤリトリで上げていく。  
迷わずブレない  
高橋哲也の落とし込み  
「まず、落とし込みはイワシの釣り」  
高橋さんは言う。  
「落とし込みの仕掛けはイワシを掛けてそのまま食わせる合理的なもの。でも、大型魚を上げるには構造的に限界

いなが、早々に6キロのヒラマサを上げてしまった。  
「根や魚礁に突進する魚を10メートル、いや、5メートルでも、いかに引き離して根ズレをかわすか。太い仕掛けと強いドラッグで勝負するけど、百戦錬磨の域に達することはできない。でも、

必ず一日の中で反応があっても食わない時間が訪れる。そのとき、多くの釣り人は仕掛けを細くしたり色いろ変える。それは面白さでもあるが、迷いだ。「イワシがなぜ掛からないのか。潮か、時間か。状況を見て、自信を持って判断できれば、疑心暗鬼になりません」  
高橋さんはイワシが釣れない時間も仕掛けを変えることなく、落ち着いて余裕を持って確実に作業をこなす。  
「一日をとおして釣れる時間はそんなにありません。むしろ釣れない時間が

があるんです」  
つまり、イワシを掛けることを優先して仕掛けを細くすれば、大型魚に切られやすい。いわゆる二律背反だ。  
その中で高橋さんはハリス20〜22号を使う。乗合船では16号前後が一般的。同船者が驚く太さだ。  
それでもイワシは掛かる。そして根ズレをかわして大型を上げる。見事なものだ。でも、それなら全員太くすればいいと思うが、そうはいかない。



① [そぎ切り] 身の質感とうま味を舌触りで味わう



② ①を右斜めに傾けて置く。厚みが違う場合は、高いほうを奥にする



① [平造り] 弾力を歯で楽しむうま味広がる



② 包丁の刃を身に当て、手前に引きながら1回で切る



▲寿風は近藤寿成船長と、奥さんの絵美さんが仲乗りとしてサポートしてくれる夫婦船